

『日本書紀典拠論』研究余滴

——「鉄の神話」四方山——

山田 純

今年の五月に『日本書紀典拠論』と題した拙著をまとめ終えた後で、ほう、と深く感じ入ったことがある。

古典では―それが漢文なら尚更―、「典拠を踏まえる」という修辞技法が多用される。過去の文献の、著名な一文一句を模倣・引用しながら作文する、ということである。従来は、これを単なる文章を脚色して飾り立てる「潤色」として看過し、その表現の実意が問われることはなかったのである。しかし、これを実意ある表現として読解していたのが古典文学成立当時の知的環境であったとするならば、我々も実意ある表現として読むべきであろう、というようなことを書いたのである。

具体的に言おう。例えば、作品内に、「酒池肉林（以酒為池、縣肉為林）」という一句が模倣／引用されていた場合、それは『史記』「殷本紀」の典拠を踏まえ

た一文ということになる。おそらく、豪華な放逸を言う文脈であろう。しかし、その「表現」がどのように読み取られたかを考えるならば、「酒で池をつくり、肉を林のように懸ける」という字義以上の意味をこの四字句は保持している。むろん単に「過度に豪華な放蕩」という、故事成語としての字義以上の意味を保持している、と言いたいわけではない。

この四字句は、典拠を踏まえた表現という、「修辞技法」としてそこにある、ということが大切なのである。皇帝に向けた文章である上表文や対策文を例に取れば、その表現は格式高い公的な文章で使用される修辞技法であった、ということである。つまり、修辞技法が駆使されているということが、きちんと担保されていることが明示されなければならないのだ。そのためには、それが

修辞技法であることが文章それ自体から看取されなければならぬという性質を持つ。つまり、誰が読んでもそれが「ああ、あの文献の典拠を踏まえた文章なのだな」ということが認知されなければならない、ということである。そうであるならば、典拠として踏まえらるる一文一句とは、当時であれば「誰もが既読の、著名な文献の一部」である必要がある。誰も知らないマニアックな文献を模倣してしまうなら、それが「典拠を踏まえた文章」と認識されないのです、それは「修辞の疎らな文章」として棄却されてしまう恐れがあるのだ。むろん、文章が書けなければ官僚としてのキャリアは閉ざされる。彼らも真剣になる。

そうであるならば、典拠として踏まえらるる文章は、当時にあつては、誰もが既読の文献を指すことになる。となると、『史記』「殷本紀」は、誰もが読んでいた文献ということになる。なれば、「酒池肉林」はその字義以上の意味―殷の紂王の暴虐記事全体―を想起させるインデックスとして働く、ということになる。つまり、「酒池肉林」は殷の紂王の事績全体を「圧縮」している語句―「紂王の事績」全体の情報を折り畳んでそこにある語句―として機能する。それが読解という「解凍」を施し

て情報が展開されたとき、そこに開示される情報は、漢字四文字の字義を遥かに超えていくだろう。

典拠として踏まえらるる文献とは、つまりは当時の知的な共通教養基盤を形成している、ということなのである。なればこそ、典拠という修辞技法が公的性格を持ち得るのである。そのような知的基盤に支えられた修辞であるならば、この漢字四字だけを読んでも十分ではない。漢字四字それ自体は、この知的共有基盤のデータベースにアクセスするキーワードなのであつて、そのデータベースから引き出される意味そのものではないためである。むろん、これを期待して修辞しているのであるから、我々もそのデータベースから引き出せる意味を加味しながら読解しなければならないのである。

現存する日本最古の歴史書『日本書紀』(七二〇年成立)の研究は、こうした典拠の表現の質クオリティを不問にしてきた。それはつまり、『日本書紀』が本来持つ情報量の全体に目を向けなかったと言つても過言ではない。もしも、これに目を向けた場合、『日本書紀』はどう読解されるべきなのか、これをまとめたのである。

この過程で、想起させられる〓解凍される情報量に、陰陽五行論系統の情報が多いということが、冒頭で述べ

た感嘆の実質であった。機会があつて目に触れた近世文献にも、典拠とそれに伴う陰陽五行論系統の語句が見出せた。そこには、確かに前近代の知的基盤を共有していた事例を見ることができのではないだろうか。製鉄事業者の神話である。

日本の神話における「鉄の神」と言えば、「天目一箇神」あめのまひとつのかみが著名である。その神の姿は、名が表すように、単眼である。⁽¹⁾

なぜ製鉄の神は単眼なのか。これについては柳田国男以来、多方面から考えられてきた。柳田は、「二つ目小僧その他」の中で、

大昔いつの代にか、神様の眷属にするつもりで、神様の祭の日に人を殺す風習があった。おそらくは最初は逃げてもすぐ捉まるように、その候補者の片目を潰し足を一本折っておいた。

として、神に捧げる生贄の姿が神のそれに投影されたと考えた。⁽²⁾

他方で、谷川健一は、

私の考えでは、目一つの神は、銅や鉄を精錬する人たちに多い職業病に由来する。長い年月、炉の炎を

見つめながら作業をおこなってきた人たちは、いつしか眼を傷つけ、一眼を失することが多い。

として、鍛冶業の実態的職業病が反映されたとする説を唱えた。⁽³⁾ 製鉄事業者集団の中で、長老達が等しく患っている職業病は、神に近づいている証左と考えられたということだろう。

現在では、この谷川論が支持されているようで、田村克己は、

ただ鍛冶屋が片目であることは、作業の上で火の具合を見るために片目をつぶるとか、目を酷使するために目をいため易いという実際上の原因があったかもしれない。⁽⁴⁾

としている。⁽⁴⁾ すなわち、世界的な鍛冶神が単眼・一足神であることを、神話論的に把握しつつ、谷川論を支持していることになる。

しかし、どうも断定は難しいという状況でもあるようだ。というのは、鉄の神が単眼である理由は、おそらくその神を語る神話において説明されるものであろうが、鉄の「神話」については、製鉄集団（タタラ集団）が余所者に冷たい閉鎖的な共同体を構築しているがために、採集できた神話が僅少なのである。このことが原因

となつて、鉄の神が単眼である理由が不明確なままなのである。ここまでの先行研究がともに参照している記事は、『鉄山必要記事』であり、これぐらいいしか系統だった鉄の神の神話は見られないのが現状なのである。

『鉄山必要記事』とは、下原重伸（下原吉兵衛正庸（一七三八〜一八二一））により著され、大阪鉄商の中川氏によつて、『鉄山秘書』として書写（天明四年春（一七八四年））されたものである。⁵⁾以降『鉄山秘書』として知られるようになる。

実際に、この書物から、鉄の神「天目一箇神」の神話を見てみよう。

まず「鑪ノ内外ニ奉祭所ノ神号」から「神号」、すなわち「神名」を確認しておきたい。⁶⁾「金屋子神」から記述が始まるのは、製鉄事業者の最高神格として冒頭を飾るためであらう。次いで、「天目一箇神」がリストアップされるが、解説はない。「金屋子神」の同一神別名ということなのであらう。この「金屋子神」天目一箇神について、以下の詳細な「神話」が語られる。

「鉄山ニ畜レ犬ヲ嫌ヒ忌ム穢事」

金屋子神自為ニ成村下ニ給ヒテ、七ヶ所ノ神多々良ヲ為レ吹廻リ歩行給フ。或トキ多々良ヨリ多

多々良エ行給フ道路ニ、犬有吠追フ、恐怖テ逃ゲ玉フ。高殿ノ戸前ニ至リテ、麻苧ノ乱レタルカ有ケル、足ノ小指ニ纏ツマヅキ転倒レテ、直ニ神去坐スト云々。七ヶ所ノ鑪失途ヲ、暗レ十方ニ歎シカ、風ト思付シハ、神変自在ノ神カマシマセシカハ、神去リ玉フトモ、何ソシルシノ無カラム哉ト。右神去リ玉フ死骸ヲ、元山押立ノ柱ニ立ソヘ奉鉄吹シトナシ、在スガコト鉄涌キ、繁昌カハラザリシトカヤ。此因縁有ユヘニ嫌レ犬と云云。鑪ノ内エハ不レ入レ犬ヲ、鑪ノ道具ニ麻苧ヲ用ヒザリシトナン。（後略）

ここは、「金屋子神」が「犬」と「麻」を嫌うその理由について記した部分である。あるとき、犬に追われて逃げる途中、麻に躓いて死んでしまうという展開である。ゆえに、犬と麻を嫌うのだ、ということである。この後に続く「別伝」では、「金屋子神天降玉フ時、一人の村下ヲ召ツレテ、播磨ノ岩鍋ト云所エ降臨坐シ、夫ヨリ乗レ白鷺ニ給ヒテ、出雲ノ非田ノ山林ニ至リ（後略）」と語る。すなわち、「金屋子神」は、かつて「白」「鳥」に乗って天から降りてきて、「播磨」から「出雲」へと赴く。すなわち、「西」行するのである。

おそらく、鉄の神が単眼である理由は、このあたりの

神話で語られていよう。そこで、やはりこの書物も前近代の書物であるということ踏まえて、典拠が踏まえられていないかどうか見ておきたい。とはいえ、私自身は上代が専門なので、中古以降近代までの書物はお手上げである。分かれるところだけ見るという失礼をお詫びしたい。

「金屋子神祭文 雲州非田ノ伝」⁽⁷⁾

(前略) 于^レ時大旱^ス、故民集^{リテ}成^ニ雨乞所^一ヲ祈^ニ雨ヲ、先祭^ニ金神^ヲ於^カ金生水^ニ雨降ル事神ノ教也、依^レ抽^ニ丹^一誠^一シカハ雨頻^ニ降^リ降^ル時ハ七月七日之申上刻也(後略)。

ここに記される「金生水」は、以下の『五行大義』に
出典がある。

『五行大義』卷第二「第四・論相生」・第一・論相生⁽⁸⁾

河間献王、問^ニ温城薰君^一曰、孝者天之経地之義也、何謂也。対曰、天有^ニ五行^一、木火土金水是也。木生^レ火、火生^レ土、土生^レ金、金生^レ水、水生^レ木。

『五行大義』とは、隋の蕭吉が撰んだとされる、陰陽五行論の基礎的テキストである。隋代に成立した『五行大義』は、唐・宋の頃には中国でも通行していたと思われるが、その後は散逸してしまった。しかし、日本には

夙に将来された。最初にその名が見えるのは、『続日本紀』天平宝字元年(七五七)十一月癸未の勅で、「陰陽生者、周易・新撰陰陽書・黄帝金匱・五行大義」と、経生・伝生・天文生・暦算生と共に、陰陽生の必読の教科書が記され、その中に『五行大義』の名が見える。⁽⁹⁾このことは、日本においては陰陽道が、この書を既に重んじていたことを示すものである。⁽¹⁰⁾

『鉄山必要記事』が、この『五行大義』を典拠として踏まえる言説を載せているとするならば、この『鉄山必要記事』は陰陽五行論系統の言説を含んでいるということになる。一度、陰陽五行論系統の言説から検討する余地があるのではないかと考え、少々の調査を施した。

陰陽五行論とは、奈良時代以降、江戸後期まで日本で支配的であった世界観・宇宙観の理論であり、物理法則から化学法則までが広くこの理論を基準として考えられてきた。いわば、古典における自然科学理論ということである。

この理論において、世界を構成する五大要素「木・火・土・金・水」が、それぞれどのような過程で生成するかを論じた「相生」論に、先の「金生水」の語句を再び見ることができる。

『五行大義』卷第二「第四・論相生」・第一・論相生^二

白虎通云、木生^レ火者、木性温暖、火伏^二其中^一、鑽灼而出、故、木生^レ火。火生^レ土者、火熱故能焚^レ木、木焚而成^レ灰、灰即土也、故、火生^レ土。土生^レ金者、金居^レ石、依^二山津潤^一而生、聚^レ土成^レ山、山必生^レ石、故、土生^レ金。金生^レ水者、少陰之氣、潤澤流^レ津、銷^レ金亦為^レ水、所^二以山雲而從^一潤、故、金生^レ水。水生^レ木者、因^二水潤^一而能生、故、水生^レ木也。

白虎通とは、『白虎通德論・五行篇』のことで、後漢・章帝の建初年間（西暦76～83年）頃に、班固（『漢書』の著者）によって編纂された書籍である。⁽¹¹⁾これを引きつつ、金属から水が発生する理論を記したのである。この部分が、『鉄山必要記事』に踏まえられるのである。

雨が必要であるから金属の神を祀る、というのは、この「金生水」の知識を基盤とした解釈的思考である、ということになる。だとするならば、金属の神が、先に記されていたような、「白」「鳥」に乗って降臨し、「犬」に負われて「麻」で躓く理由も、陰陽五行論系統の言説をその解釈の基盤としていないだろうか。

『五行大義』卷第三「第十四・論雜配」・第三・論配^二氣味^二

（月令云）、秋食^二麻与^一犬^レ。麻属^レ金、犬亦金畜、故從^レ秋也。

（秋は麻と犬とを食す。麻は金に属す、犬も亦た金の畜、故に秋に従ふなり。）

「金」神が「犬」に追われて「麻」で転んで死ぬという流れは、すべて陰陽五行論における「金」氣に配当されている要素であることが分かる。言うまでもなく、「白」「鳥」に乗ってやってきたという部分も、五大要素「金」に色を配当するならば「白」であり、方角を配当するならば「西」、すなわち十二支の方角で言えば「酉」に配当されるために他ならない。⁽¹²⁾

このように、鉄の神を巡る神話には、陰陽五行論系統の言説が多分に鏤められている可能性を見てきた。そうであるならば、鉄の神が単眼である理由も、陰陽五行論的思想の上にあるものではないか、ということになる。顔の部位もまた、五行に配当されるものであるため、「目」の五行配当について確認したい。

『五行大義』卷第三「第十四・論雜配」・第四・配^二蔵府^二

河上公、注_二老子_一云、肝藏_レ魂、肺藏_レ魄、心藏_レ神、腎藏_レ精、脾藏_レ志。五藏尽傷、則五神去矣。道經義云、魂居_レ肝、魄在_レ肺、神処_レ心、精藏_レ腎、志託_レ脾。此与_二素問_一同。魂為_二木氣_一、神為_二火氣_一、志為_二土氣_一、魄為_二金氣_一、精為_二水氣_一。魂通_二於目_一、神通_二於舌_一、志通_二於口_一、魄通_二於鼻_一、精通_二於耳_一。

「魂」は「木」に配当され、その「魂」は顔の部位で言えば「目」に配当される。すなわち、「目」は「木」氣に当たる、ということになる。

これを、

『五行大義』卷第二「第六・論五行相雜」・第一・

論五行體雜_二

就_レ事而論_レ議、則不_レ爾。或有或無。質弱者、則體相容。質堅者、則體不_二相容_一。

金中無_レ木、木中無_レ金。金木以_二正相害_一故。

と併せて考えるならば、「金」の中には「木」は存在し得ない、ということになる。というのは、両者は互いに害し合う「相克」の関係であるためである。であるならば、「金」の氣の極大である「金神」の中には「木」氣は存在し得ないということになる。その過剰な自らの

「金」氣は、自らの「木」氣を害してしまうほどののである。自らの「木」氣―顔の部位で言えば「目」―さえ自ら潰してしまうほどの「金」氣の体现者だからこそ、ただ「金神」たり得るのである。これこそが、鉄の神が単眼であることの理論的な―陰陽五行論的な―解釈であろう。

とはいえ、この研究余滴で述べているのは、あくまで近世的な「解釈」である。すなわち、近世のテキストが「金屋子神_二天目一箇神_一」について叙述するとき、それを「金」神として説明した解釈の結果として、陰陽五行論系統の言説が現れているにすぎない、ということである。つまり、「天目一箇神」の「発生」や「起源」を論じたいわけではないのである。⁽¹³⁾ 神名由来の根本に陰陽五行論的思考を据えるという企図を本稿は持たない。実際、「天目一箇神」と名付けられた理由は不明のままなのである。今回は、近世の資料が鉄の神の由来を、陰陽五行論ベースで「解釈していた」という現象だけを指摘したのである。繰り返すが、「発生論」を論じようという意図は全くない。

しかし一方で、製鉄技術そのものの起源を問うならば、別の考えもできよう。ここでは論じないが、考えて

みれば、製鉄技術そのものは中国から渡来してきたのである。

とくに中国の漢代には製鉄関係の技術が続々と伝来されたが、宗教関係では陰陽、十干、十二支などの迷信的な天文や暦法が入り、天空をまわる五つの星に五原素の木火土金水をあてはめ、これをもつてすべての事象の究極原理と考える、陰陽五行説が盛んに行われた。そして、これに原始宗教の自然物崇拜や偶像崇拜がからみあつて、鉄山独特の信仰形態ができあがつていった⁽¹⁴⁾。

そもそも、製鉄技術それ自体が中国から来たならば、その構成「理論」もまた「技術」にパッケージングされて伝来したと考えられるのではないだろうか。理論に基づかない技術は、伝承できないためである。

この「パッケージングされた」理論という知の在り方が気になるのである。技術を包括的に説明する理論こそが、共通の知的基盤と相接するためである。そしてそれは古典作品にもパッケージされているのではないか、その全容を明らかにするために必要な過程を目算したところで、その遙か遠き道であることを理解した。先の「ほうっ」は絶望のため息でもあったのだ。

【注】

- (1) 田村克己「鉄の民俗」(日本民俗文化大系 第三卷 森浩一『稻と鉄』一九八三年二月 小学館)。
- (2) 柳田国男『一つ目小僧その他』(『柳田国男全集 6』一九八九年十月 筑摩書房)。
- (3) 谷川健一『青銅の神の足跡』(一九七九年六月 集英社。初出は『すばる』二十四号 一九七六年六月)。
- (4) 田村克己「天目一箇神」(『講座 日本文学 神話下』(解釈と鑑賞別冊 一九七七年十一月)。
- (5) 生田清「鉄山秘書の著者・下原重仲について」(『科学史研究』第六八号 一九六三年)。後に、三枝博音編『日本科学古典全書』所収時、『鉄山必要記事』に戻される。
- (6) 『鉄山必要記事(鉄山秘書)』(日本庶民生活史料集成 第十卷 一九七〇年五月 小学館)。旧字は新字に改めた。以下同じ。
- (7) 『日本庶民生活史料集成』および同補注に拠る。
- (8) テキストは『新編漢文選 7 五行大義』(中村璋八他 一九九八年一月 明治書院)に拠る。
- (9) 『続日本紀』天平宝字元年十一月十五日条。『続日

本紀』のテキストは、『新日本古典文学大系 続日本紀』（一九八九年三月 岩波書店）に拠る。

(10) 前掲注(8)『五行大義』解説に拠る。

(11) 前掲注(8)『五行大義』解説に拠る。ただし、現存する『白虎通德論・五行篇』とは記載が異なる。

(12) 『日本庶民生活史料集成』および同補注に拠る。

(13) 吉野裕子『陰陽五行と日本の民族』（一九八三年六月 人文書院）が「発生」を論じた代表であろう。しかし、近世テキストが、連綿と保存してきた伝承を掲載しているという担保がない以上、あくまで表現の水準で捉えることしかできまい。なればそれは近世のテキストが示す解釈に留まるべきであると考ええる。

(14) 窪田蔵郎『鉄から読む日本の歴史』（二〇〇三年三月 講談社。初出は『鉄の生活史』一九六六年五月 角川書店）。

（本学准教授）